

## 幼児期における色彩バウムテストとCBCLの関係

道廣倫子

玉木健弘

日下部典子

福山大学大学院人間科学研究科 武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科 福山大学人間文化学部心理学科

キーワード：色彩バウムテスト, CBCL, 幼児期

### はじめに

近年、幼児期に落ち着きがない、仲良くできないといった問題を起こす幼児が増えており、保育の現場で対応に困っている保育士も少なくない。この幼児期の問題行動は、発達障害によるものか、環境によるものかについては明確になっていない。

子どもの問題行動の評価に用いることができる質問紙の一つにChild Behavior Checklist(以下、CBCLと示す)がある。このCBCLはAchenbach(1991)によって開発され、現在または過去6ヵ月以内の子どもの状態について、身近にいる親や教師が答えるものである(松村, 2002)。本研究で用いた4-18歳用は保護者が記入する子どもの行動と情緒を包括的に評価するチェックリストで、問題行動の項目(「尺度1:引きこもり」、「尺度2:身体的訴え」、「尺度3:不安・抑うつ」、「尺度4:社会性の問題」、「尺度5:思考の問題」、「尺度6:注意の問題」、「尺度7:非行的行動」、「尺度8:攻撃的行動」、「その他の問題」)で構成されている。各尺度についてみていくと、「ひきこもり」では、ひきこもる、しゃべろうとしないなど、「身体的訴え」では、めまい、頭痛、腹痛など、「社会性の問題」では行動が幼い、仲良くできないなど、「思考の問題」では強迫観念、強迫行為など、「注意の問題」では注意が続かない、落ち着きがない、衝動的など、「非行的行動」では、うそをつく、家出をするなど、「攻撃的行動」では言うことをきかない、けんかをする、物を壊すといった項目で構成されている。さらに、2つの上位概念である「尺度1:ひきこもり」、「尺度2:身体的訴え」、「尺度3:不安・抑うつ」の合計から求められる内向尺度(Internalizing)と、「尺度7:非行的行動」、「尺度8:攻撃的行動」の合計から求められる外向尺度(Externalizing)、および総得点からプロフィールが求められる(坪井, 2005)。CBCLは、①子どもの発達診断の評価用具として、②多様な問題行動を呈する子どもの一般的臨床的評価の手段として、③治療や指導効果の判定のための評価の手段として、子どもを対象とした臨床心理学的研究の行動的指標として、各国の児童臨床現場で多用されている(戸ヶ崎・坂野, 1998)。

手島・澤田・川崎・辻(1995)はCBCLを用いて4歳から11歳児の男子204名、女子220名の行動の評価を行った。その結果、性や年齢にあまり影響を受けず、小児の行動評価に使うことができると報告している。また手島・澤田・川崎・円城寺・辻(1996)の研究によるとCBCLは保育所、学校で見落とされがちな問題について、家庭からの情報を得るのに役に立つと報告している。また坪井(2005)は、被虐待体験群は、社会性の問題、思考の問題、非行的行動、攻撃的行動の各尺度と外向尺度、総得点で虐待体験のない群よりも得点が高く、また行動に異常ありと判定される臨床域に入る子どもの割合が多かったと報告している。そして、手島・川崎・岩永・本山・辻(1994)はCBCLを用いて、LDおよび自閉症児の行動を検討した結果、CBCLは子どもの全体像をとらえる方法の一つとして、小児の行動評価に使うことができると報告している。

このように幼児期の問題行動の評価について、質問紙での研究はこれまで多く行われているが、投影法であるバウムテストや色彩バウムテストなどを用いた研究は数少ない。子どもの問題行動の評価では、問題行動の評価をするだけではなく、問題行動を起こす要因、例えば、パーソナリティや感情についても検討をすべきであると考えられる。そのため、パーソナリティを測定できる可能性が高い投影法を用いて検討することが、必要ではないかと考えた。投影法はさまざまあるが、バウムテストは被験者にテストを受けるという緊張を与えることが少なく、また、幼児でも実施が可能であることから、今回はバウムテストを使用することとした。

バウムテストには2枚法や枠付け法などいくつかの特殊技法があるが、中でも「黒一色彩バウムテスト」は、従来の黒色バウムに加えて色彩バウムという色彩刺激を加えることによって被験者の情緒的側面をより把握できるという効果が認められている(村田, 2002)。この色彩バウムテストは、自由画などの他の描画法に比べて制約も少なく、作業量も少ないため本研究では、色彩バウムテストを使用することとした。

幼児のバウムテストの研究による特徴として、金盛(1981)は色彩を分析することにより、情緒のおよび個性の個別的特徴を、より深く知ることができ、幼児・児童の問題傾向を認識するための補助資料として役立てることができることを明らかにしている。また、通常行うバウムテストよりも、被験者の情緒的側面を把握できる効果が認められている(村田, 2002)。さらに、道廣・玉木(2009)が色彩バウムテストを用いて行った仲間関係について調査した結果、仲間関係形成の仕方や情緒的側面が色彩数や描画特徴に表れることを明らかにした。

そこで、本研究では、色彩バウムテストと他者評定であるCBCLを実施し、色彩バウムテストの描画特徴から読み取れる子どもの特徴がCBCLの結果に関係があるかについて検討した。なお、今回、CBCLチェックリストの評価は、保育園児を担当している保育士に依頼した。

## 方 法

**調査対象児** 岡山県内の保育園に所属するA組の女子11名( $M=4.55$ 歳,  $SD=0.50$ ), 男子11名( $M=4.36$ 歳,  $SD=0.48$ ), 計23名( $M=4.43$ 歳,  $SD=0.50$ )。

**実施方法** 実施に関しては、事前に園長の許可を得て、園児に対して色彩バウムテストを行った。色彩バウムテストは他児が入室することのない、周りの音が聞こえにくい部屋で行った。調査は2人組で実施し、女子・女子、女子・男子、男子・男子の組み合わせで行った。なお、調査の順番は、ランダムに決定した。調査時間は約10分であった。CBCL/4-18質問紙は、調査を行った組の保育士1名(保育士歴は約3年)に記入してもらった。

**実施期間** 2007年9月上旬に調査を行なった。

**色彩バウムテスト** 色彩バウムテストはA4の画用紙を縦向きにそろえ、12色のクレヨンで実のなる木を描いてもらった。その際の指示は「ここにあるクレヨンを使って、1本の実のなる木を描いてください。色はどれを何色使ってもかまいません。」とした。指示については、調査者が園児に読み、指示後、色彩バウムテスト実施した。また、色彩バウムテスト実施中に幼児の描画の様子を観察し、木の描画方法、描画中の行動などを検査者はメモに取って記録を行った。なお、クレヨンの色の内訳は、白・灰色・黒・茶色・薄橙(肌色)・桃色・青・水色・緑・黄緑・黄色・赤であった。

**色彩バウムの分析方法** 岩川・岩川(1993)が作成した幼児用の分析項目や杉浦(1991)のバウム分析表を参考にし、バウム分析項目を作成した。なお、分析に使用する項目は、付表に示している。

**CBCL チェックリスト** 井潤・上林・中田・北・藤井・倉本・根岸・手塚・岡田・名取(2001)の「日本語版CBCL/4-18質問紙」の8尺度85項目の中から年齢に対して当てはまらないもの、ふさわしくないものなど24項目を削除した。また、各尺度に重複している項目を1つにし、55項目を使用した。削除した項目は「言うことをきかない」、「完璧でなければ」、「大切に思われない」、「ねらわれている」、「悪い子とたむろする」、「音や声が聞こえる」、「体がひきつる」、「めまい」、「自分が悪いと思う」、「太りすぎている」、「成績が悪い」、「年上を好む」、「年下を好む」、「家出をする」、「秘密にする」、「ないものがみえる」、「放火する」、「家の中で盗み」、「家の外で盗み」、「変な考え」、「セックスのことを考える」、「怠学」、「酒やクスリのことを考える」、「器物破損」である。また「学校で言うことを聞かない」を「保育園で言うことを聞かない」に項目を変更した。

指示は「次のページからの質問は、子どものさまざまな行動をあげたものです。園児の現在、もしくは過去6ヶ月以内の状態について、園児の行動にあてはまると思うところに1つだけ○をしてください。」とした。

回答方法は「あてはまる」、「ややまたはときどきあてはまる」、「あてはまらない」の3件法で行い、「あてはまる」を2点、「ややまたはときどきあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として得点化した。得点範囲は、「引きこもり」尺度0～16点、「身体的訴え」尺度0～16点、「不安・抑うつ」尺度0～20点、「社会性の問題」尺度0～12点、「思考の問題」0～6点、「注意の問題」尺度0～18点、「非行的行動」尺度0～6点、「攻撃的行動」尺度0～38点、「内向尺度」0～52点、「外向尺度」0～44点であった。

## 結 果

まず、調査対象者全員のCBCLの各項目を尺度ごとにわけ、尺度得点と総得点を算出した。各尺度の平均値ならびに標準偏差についてみると、「引きこもり」の平均値は女子0.36( $SD=0.64$ )、男子0.82( $SD=1.99$ )、全体0.59( $SD=1.50$ )、「身体的訴え」は、尺度項目に当てはまる園児がいなかったため0点であり、「不安・抑うつ」の平均値は女子1.55( $SD=1.16$ )、男子2.55( $SD=1.83$ )、全体2.05( $SD=1.61$ )、「社会性の問題」の平均値は女子0.55( $SD=0.89$ )、男子1.73( $SD=1.54$ )、全体1.14( $SD=1.39$ )、「思考の問題」の平均値は女子0.00( $SD=0.00$ )、男子0.36( $SD=0.77$ )、全体0.18( $SD=0.49$ )、「注意の問題」の平均値は女子1.18( $SD=1.34$ )、男子1.91( $SD=1.78$ )、全体1.55( $SD=1.62$ )、「非行的行動」の平均値は女子0.18( $SD=0.57$ )、男子0.18( $SD=0.39$ )、全体0.18( $SD=0.49$ )、「攻撃的行動」の平均値は女子1.55( $SD=2.10$ )、男子2.09( $SD=1.98$ )、全体1.82( $SD=2.06$ )となった。次に、内向尺度の平均値は女子1.91( $SD=1.31$ )、男子3.36( $SD=3.14$ )、全体2.64( $SD=2.51$ )、外向尺度の平均値は女子1.73( $SD=2.14$ )、男子2.27( $SD=2.09$ )、全体2.00( $SD=2.13$ )、総得点の平均値は女子5.36( $SD=4.37$ )、男子9.64( $SD=6.11$ )、全体7.50( $SD=5.73$ )であった。また、各尺度の性差を検討するためにt検定を行った。その結果、すべての尺度間で、男女に有意な差はみられなかった。また、内向尺度、外向尺度、総得点でも男女に有意な差はみられなかった。なお身体的訴えでは分散および平均が同じであったため分析することができなかった。

次にCBCLの全体総得点の平均値で2群に分け、さらに、それぞれの群から、特に総得点が高かった園児、低かった園児の男女それぞれ2名を抽出し、高・低群(男女それぞれ2名)とした。表1は各群におけるCBCL尺度ごとの平均値および標準偏差を示している。

表1 各群におけるCBCL尺度ごとの平均値および標準偏差

	低群			高群		
	女子 (N=2)	男子 (N=2)	計 (N=4)	女子 (N=2)	男子 (N=2)	計 (N=4)
I ひきこもり	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.50 (0.50)	4.00 (3.00)	2.25 (2.77)
II 身体的訴え	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)
III 不安／抑うつ	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	2.00 (1.00)	3.50 (0.50)	2.75 (1.09)
IV 社会性の問題	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	2.00 (1.00)	3.50 (0.50)	2.75 (1.09)
V 思考の問題	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	2.00 (0.00)	1.00 (1.00)
VI 注意の問題	0.50 (0.50)	0.00 (0.00)	0.25 (0.43)	3.50 (0.50)	4.00 (0.00)	3.75 (0.43)
VII 非行的行動	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)
VIII 攻撃的行動	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	4.50 (1.50)	1.50 (1.50)	3.00 (2.12)
内向尺度	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	2.50 (0.50)	7.50 (3.50)	5.00 (3.54)
外向尺度	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	0.00 (0.00)	4.50 (1.50)	1.50 (1.50)	3.00 (2.12)
総得点	0.50 (0.50)	0.00 (0.00)	0.25 (0.43)	12.50 (1.50)	18.50 (1.50)	15.50 (3.35)

※( )内は標準偏差を示す

低群では、注意の問題の項目にのみチェックがついていたが、高群では、身体的訴え以外の項目に全てチェックがついており、低群に比べ得点が高かった。また高群の女子と男子の特徴としては、女子では、攻撃的行動尺度、外向尺度が高く、男子ではひきこもり尺度、不安・抑うつ、社会性の問題尺度、思考の問題尺度、注意の問題尺度、内向尺度が高かった。なお、全対象者で身体的訴え、非行的行動尺度は0点であった。

次に抽出した園児の色彩バウムテストを分析し、各群の色彩バウムテストにおける個人の描画特徴を表2に示した。なお、各分類内容の形態については付表に示した。

CBCLの総得点低群では、左傾き、花描写なし、実の描写ありが共通してみられた。また、樹形分類、幹、枝、樹冠、葉、根、地平線、その他がみられなかった。CBCLの総得点高群では、幹輪郭線弱い線、描画位置中央、葉描写なし、花、根、地平線、その他がともにみられた。また、樹形分類、枝、樹幹、葉はみられなかった。すなわち、得点群高群では、低群と比較すると描画特徴が多くみられた。

表2 色彩バウムテストにおけるCBCL各群の描画特徴

	低群	高群
<b>I 樹形分類</b>	—	—
<b>II 樹木描画全体像</b>	—	—
①描写位置	—	中央
②樹木サイズ	—	—
③樹木の描写バランス	左傾き	—
<b>III 幹</b>	—	輪郭：弱い線
<b>IV 枝</b>	—	—
<b>V 樹冠部(冠部)</b>	—	—
<b>VI 葉</b>	—	描写なし
<b>VII 実</b>	描写あり	—
<b>VIII 花</b>	描写なし	描写なし
<b>IX 根</b>	—	描写なし
<b>X 地平線</b>	—	描写なし
<b>XI その他</b>	—	描写なし

※I～XIの分類内容については付表参照。  
 ※—は描画特徴が一致していないことを表す。

## 考 察

本研究では、色彩バウムテストと他者評定であるCBCLを実施し、色彩バウムテストの描画特徴から読み取れる子どもの特徴とCBCLの結果との関係について検討した。

まず、調査対象者全員のCBCLの各尺度、総得点ともに男女に差がないことが示された。このことから保育園児の問題行動には性差がないことが示唆された。

次に、CBCL得点低群、高群の個人得点から、各尺度、総得点は低群よりも高群の得点が高いことが示され、ひきこもり、不安・抑うつ、社会性の問題、思考の問題、注意の問題、内向尺度において男子のほうが女子よりも得点が高いことも明らかとなった。この結果から、高群の子どもは全体的にまんべんなく問題を抱えていることが示された。

さらに、色彩バウムテストの描画特徴を検討した。その結果、CBCLの総得点低群では、左傾き、花描写なし、実の描写ありが全員にみられた。これらの描画特徴をみていくと、左傾き描写には、内へ向かう、親密な友人がいない、過去への回顧、母への執着(杉浦, 1991)という意味がある。これらをCBCL質問項目と比較すると、CBCLにこのような意味が含まれている内容はなかったことから、これらの内容は色彩バウムテストのみで測定できると

考えられる。

CBCL の総得点高群では、幹輪郭線弱い線、描画位置中央、葉描写なし、花、根、地平線、その他が全員にみられた。これらの描画特徴をみていくと、弱い線には、エネルギーが弱い、抑うつ、無気力、ためらい、不安定(杉浦, 1991)という意味がある。CBCL の結果と対応させると、幹輪郭線を弱い線で描写する子は、「不安・抑うつ尺度」の得点が高く、「心配する」「人目を気にする」といった項目にチェックがついており、CBCL の結果と対応していた。中央描写には、常識的、誠実、中庸、努力家、安定、自己の位置確保(杉浦, 1991)という意味がある。CBCL の結果と対応させると、中央描写を行う子は「攻撃的行動尺度」の得点が高く、「頑固・不安定」「自慢する」といった項目にチェックがついており、これらの内容は中央描写の意味と対応していなかった。以上のことから、幹の輪郭線を弱い線で描く子どもは、CBCL の「不安・抑うつ尺度」の得点が高いことが明らかとなり、この行動特徴は色彩バウムテストでも測定できると考えられるが、中央描写については対応が見られなかった。

今回の結果は、島田(2006)がいう CBCL(4-18 歳用)にみられた不適応状態を、バウムテストの幹および枝の描画特徴から読み取ることが可能であることを部分的に支持したといえる。島田(2006)は、CBCL の質問項目をすべて使用していたこと、また色彩バウムテストではなく、通常バウムテストを使用したといった違いがあるため、単純に今回の結果を比較することはできない。しかし、色彩バウムテストに示された描画特徴は、CBCL の結果と関係があることが示唆された。すなわち、CBCL でみられた指標を色彩バウムテストで測定できることが一部可能であると思われる。今後の課題としては、CBCL 質問紙と色彩バウムテストの関係性だけでなく他の質問紙での行動特徴と色彩バウムテストの描画特徴との関係性を見ていくことがあげられる。また、色彩が持つ意味や色彩バウムテストの分析項目を検討していくことが必要であると考えられる。

## 引用文献

- 井濶知美・上林靖子・中田洋二郎・北 道子・藤井浩子・倉本英彦・根岸敬矩・手塚光喜・岡田愛香・名取宏美 (2001). Child Behavior Checklist/4-18 日本語版の開発 小児の精神と神経, 41, 243-252.
- 岩川 淳・岩川真弥 (1993). 幼児の樹木画の研究(1)―社会性の発達とバウム描画特徴― 信愛紀要, 33, 77-84.
- 金盛浦子 (1981). 第2章 描画表現による人格診断 2 樹の描画による人格診断 岩井 寛(編) 描画による心の診断 子どもの正常と異常を見るために, 日本文化科学社, Pp43-68.
- 松村京子 (2002). 社会・情動発達のアセスメント 別府 治(編) 柏木恵子・藤永 保(監修) 臨床発達心理学③ 社会・情動発達とその支援, ミネルヴァ書房, Pp160-180.
- 道廣倫子・玉木健弘 (2009). 幼児期の仲間関係と色彩バウムテストの関係性 福山大学こころの健康相談室紀要, 3, 79-86.
- 村田陽子 (2002). セルフ・エスティームと黒一色彩バウムテストとの関連性 山口大学心理臨床研究/山口大学教育学部心理教育相談室 [編], 2, 89-97.
- 坂野雄二・佐藤健二・佐々木和義・久保義郎・坂爪一幸・土肥夕美子・市井雅哉 (1995). Child Behavior Checklist(CBCL) 日本語版による自閉性障害の診断と評価: CBCL の臨床的応用可能性の検討 研究助成論文集, 31, 32-41.
- 島田 藍 (2006). 幼児期における問題行動とバウム・テストの描画特質に関する研究―Child Behavior Checklist プロフィールとの関係性を通して― 法政大学大学院紀要, 56, 285.
- 杉浦守邦 (1991). ヘルス・カウンセリングの進め方3 心理テストの進め方・読み方 東山書房.
- 手島直子・川崎千里・岩永竜一郎・本山和徳・辻 芳郎 (1994). Child Behavior Checklist の有用性について 日本小児保健学会講演集 41, 658-659.
- 手島直子・澤田 敬・川崎千里・辻 芳郎 (1995). Child Behavior Checklist の日本人小児への適応 日本小児保健学

会講演集, 42, 448-449.

手島直子・澤田 敬・川崎千里・円城寺しづか・辻 芳郎 (1996). Child Behavior Checklist と学校・保育園での問題との関連性 日本小児保健学会講演集, 43, 192-193.

戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1998). Child Behavior Checklist(CBCL)日本語版による診断と評価 精神科診断学, 9, 235-245.

坪井裕子 (2005). Child Behavior Checklist/4-18(CBCL)による被虐待児の行動と情緒の特徴—児童養護施設における調査の検討— 教育心理学研究, 53, 110-121.

付表 分類項目の形態

Ⅰ樹形分類	Ⅳ枝	Ⅵ花
<ul style="list-style-type: none"> <li>・冠型…幹と冠で描かれているもの</li> <li>・幹枝型…下から上へと伸びた幹と幹の側から出た枝があるもの</li> <li>・放散型…幹の先端部で枝分かれているもの</li> <li>・特殊型…冠型、幹枝型、放散型、幹付属の水準にあるが、例えば幹枝型で幹の先端に葉などが直接ついたり、先端が分岐しているものや、放散型で幹の両側の上部からも枝が出ているものなど</li> <li>・葉実無…葉と実が描かれていないもの</li> <li>・幹のみ…幹だけ描かれているもの</li> <li>・幹付属…幹に枝が付属しているもの</li> </ul>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…枝の有無</li> <li>②全一線枝…全ての枝が一線で描かれているもの</li> <li>③一部一線枝…一部の枝が一線で描かれているもの</li> <li>④全二線枝…全ての枝が二線で描かれているもの</li> <li>⑤全枝先直…全ての枝の先が塞がれているもの</li> <li>⑥一部枝先直…一部の枝の先が塞がれているもの</li> <li>⑦枝先鋭…枝の先が鋭いもの</li> <li>⑧こん棒枝…枝がこん棒のような形のもの</li> <li>⑨管状枝…枝が管のようになっているようなもの</li> <li>⑩水平枝…枝が水平になっているもの</li> <li>⑪一部水平…一部の枝が水平になっているもの</li> <li>⑫斜上方伸枝…枝が斜め上に伸びているもの</li> <li>⑬上方伸枝…枝が上部に伸びているもの</li> <li>⑭垂れ枝…枝が垂れているもの</li> <li>⑮常同描写…描かれている枝がすべて同じパターンのもの</li> <li>⑯根元までの枝…枝が根元近くまで描かれているもの</li> <li>⑰枝はみ出…枝が用紙からはみ出ているもの</li> <li>⑱枝分枝…枝が分かれているもの</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…花の有無</li> <li>②樹冠内花…樹冠内に花が描かれているもの</li> <li>③常同描写…描かれている花がすべて同じパターンのもの</li> </ol>
Ⅱ樹木描画全体像	Ⅴ樹冠部(冠部)	Ⅶ根
<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写位置 <ul style="list-style-type: none"> <li>・中央…用紙の縦中央に描かれているもの</li> <li>・右上…用紙の右上に描かれているもの</li> <li>・右下…用紙の右下に描かれているもの</li> <li>・左上…用紙の左上に描かれているもの</li> <li>・左下…用紙の左下に描かれているもの</li> <li>・上側…用紙の上側に描かれているもの</li> <li>・下側…用紙の下側に描かれているもの</li> <li>・右寄り…用紙の縦中央から右に寄っているもの</li> <li>・左寄り…用紙の縦中央から左に寄っているもの</li> </ul> </li> <li>②樹木サイズ <ul style="list-style-type: none"> <li>・小&lt;1/9…用紙の1/9より小さく描かれているもの</li> <li>・1/9~1/3…用紙の1/9~1/3の大きさで描かれているもの</li> <li>・1/3~2/3…用紙の1/3~2/3の大きさで描かれているもの</li> <li>・2/3&lt;大…用紙の2/3より大きく描かれているもの</li> </ul> </li> <li>③樹木の描写バランス <ul style="list-style-type: none"> <li>・右強調…幹の中心から右側が強調されているもの</li> <li>・左強調…幹の中心から左側が強調されているもの</li> <li>・バランス(傾き)…幹の中心から樹木が右側か左側に傾いているもの</li> </ul> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…樹冠の有無</li> <li>②円形樹冠…冠部が円形に描かれているもの</li> <li>③雲形樹冠…冠部が雲形に描かれているもの</li> <li>④形崩樹冠…冠部の形が崩れているもの</li> <li>⑤垂れ冠部…幹に近い冠部が垂れているもの</li> <li>⑥枝先雲線…枝の先に雲形の冠部が描かれているもの</li> <li>⑦長幹小冠…幹が長く、冠部が小さいもの</li> <li>⑧短幹大冠…幹が短く、冠部が大きいもの</li> <li>⑨押しつぶされて冠…冠部の上部が押しつぶされているもの</li> <li>⑩樹冠内枝…枝が樹冠の中に描かれているもの</li> <li>⑪塗りつぶし…冠部が塗りつぶされているもの</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…根の有無</li> <li>②一線根…根が一線で描かれているもの</li> <li>③二線根…根が二線で描かれているもの</li> </ol>
Ⅲ幹	Ⅷ葉	Ⅷ地平線
<ol style="list-style-type: none"> <li>①一線幹…幹が一線で描かれているもの</li> <li>②幹下直…幹の根元が(直線で)閉じられているもの</li> <li>③幹上直…幹の上端が(直線で)閉じられているもの</li> <li>④幹下縁立…用紙の線から幹の下がはみ出ているもの</li> <li>⑤幹上縁立…用紙の線から幹の上部がはみ出ているもの</li> <li>⑥幹平行…幹が平行なもの</li> <li>⑦幹先太…幹の先が太いもの</li> <li>⑧幹先細…幹の先が細いもの</li> <li>⑨幹上開…枝がなく、幹の上部が開いているもの</li> <li>⑩蛇行幹…幹が蛇行しているもの</li> <li>⑪大幹…幹が大きいもの</li> <li>⑫小幹…幹が小さいもの</li> <li>⑬幹基部膨らみ <ul style="list-style-type: none"> <li>・両側…幹の基部が右側と左側に膨らんでいるもの</li> <li>・右側…幹の基部が右側に膨らんでいるもの</li> <li>・左側…幹の基部が左側に膨らんでいるもの</li> </ul> </li> <li>⑭幹輪郭線描写 <ol style="list-style-type: none"> <li>①強い線…濃く、線がはっきりしているもの</li> <li>②弱い線…かすれた線のもの</li> <li>③不規則…まっすぐな線ではなく、ゆがんでいる線のもの</li> <li>・他…①, ②, ③以外のもの</li> </ol> </li> <li>⑮樹皮の描写 <ol style="list-style-type: none"> <li>①空白幹…幹を塗りつぶしていないもの</li> <li>②塗りつぶす…幹を塗りつぶしているもの</li> <li>・他…①, ②以外のもの</li> </ol> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…葉の有無</li> <li>②樹冠外葉…樹冠の外に葉が描かれているもの</li> <li>③樹冠内葉…樹冠の中に葉が描かれているもの</li> <li>④常同描写…描かれている葉がすべて同じパターンのもの</li> <li>⑤落ち葉…葉が落ちている情景を描いているもの</li> <li>⑥塗りつぶし…葉が塗りつぶされているもの</li> <li>葉実空間倒置…葉や実が通常に見られる配置と逆のもの</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…地平線の有無</li> <li>②一線描写…地平線を一線で描いているもの</li> <li>③地平線強調…地平線を塗りつぶしているもの</li> </ol>
Ⅳその他	Ⅸ実	Ⅳその他
	<ol style="list-style-type: none"> <li>①描写…実の有無</li> <li>②樹冠内実…樹冠の中に実が描かれているもの</li> <li>③樹冠外実…樹冠の外に実が描かれているもの</li> <li>④常同描写…描かれている実がすべて同じパターンのもの</li> <li>⑤実の数</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>①背景 <ul style="list-style-type: none"> <li>①人物…背景に人物が描かれているもの</li> <li>②虫鳥動物…背景に虫、鳥、動物が描かれているもの</li> <li>③太陽…背景に太陽が描かれているもの</li> <li>④雲…背景に雲が描かれているもの</li> <li>⑤建物…背景に建物、草が描かれているもの</li> </ul> </li> </ol>

Relationship between Color Baum Test and Child Behavior Checklist(CBCL) of preschoolers

Satoko Michihiro, Takehiro Tamaki and Noriko Kusakabe

The purpose of this study was to investigate relationship between the result of Color Baum Test and CBCL. In this study, 22 preschoolers were requested to draw a tree on paper for Color Baum Test, and the nurse of preschoolers was requested to complete Child Behavior Checklist(CBCL). As a result, two boys of high scores were higher than two girls of high scores in “Withdrawn”, “Anxious/Depressed”, “Social Problems”, “Attention Problems”, “Internalizing”, and “Thought Problems”.

Children drawing a tree bent left were suggested to be introversion and non-active by Color Baum Test, and these items were not measured by CBCL. Children who drew trunk in a weak line were suspected to be uneasiness and depression by Color Baum Test, and CBCL showed the same result of these children. These results suggested that part of the result of Color Baum Test was related to result of CBCL.

(指導教員：日下部典子)